
ハネグンのほらふき娘

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハネグンのほらふき娘

【Nコード】

N0949Y

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

物語好き高校生「そよ」の物語。

「夢のお告げ通りだ」

いつものように近所の子をひきつれ歩くそよに声をかけてきたのは、同級生の男子だった。

序章

いとこの中で一番の年長者である私は、ことあるごとに年下のいとこたちの面倒を見るように頼まれた。

「そよちゃん、遊んで」

幼なじみ同士で結婚し地元に残った両親は、それぞれの親（つまり私の祖父母同士）や兄弟姉妹との仲もよく、何かあるとすぐ集まり、それはとてもにぎやかなものになった。そんな中、わらわらと群がってくるいとこたちの相手をするのは、当然のように年長者の私で、その一番手っとり早い方法が、絵本を読んで聞かせることだった。

昔から本を読むのが好きだった私は、そこらへんの、お子さまが好きな物語のツボってやつを自らの経験で知っていたからチョイスには自信があったし、幸い物語好きDNAは他のいとこたちにも流れていたようで（あ、流れるのはDNAじゃなくて、血か？　まあ、いっか）、それがうまい具合にマッチしたってこと。

大人たちが酒盛りをはじめた隣の部屋で、私は延々とそれこそを声が枯れるまで絵本を読んでいた。絵本がなくなると、短めの童話を読んだりもした。まあ、本当はそこまでやらなくてもいいのかもしれないけど、物語の続きをきらきらとした瞳で待ついとこの顔を見ると、ついつい読んであげたくなっちゃうっていうのは、その気持ち——物語の続きをわくわくと待つ気持ち、すっごくわかったから。

転機になったのは、親戚みんなで旅行に行ったときのこと。

またまたの大集団で、注目を集めながらの旅行だったんだけど、その移動の電車の中で、とんでもないハプニングが起きた。

私が、絵本を持ってくるのを忘れてしまったのだ。

けど、そんなことを知るはずもなくお構いなしのいとこたちは、いつものように私に物語をねだり始めた。予めわかつている集まりや旅行の際には、新しい絵本を必ず一冊は仕入れる（勿論、親からのお金で）ことにしているのも知っているいとこたちは、今日の物語はなんだろう、なんてうきうきしだした。

絵本はない、なんて言ったもんなら暴徒化しかねないいとこたちの姿を想像し戦いた私は、玄関の靴箱の上に置き忘れた絵本の内容を思い出し、なんとか話しはじめた。

話しながら、最初こそ忠実にその内容を辿ろうとしていた自分が、徐々にその内容を見失い、自分が楽しいと思うように話を変えながら話してしまうこと、そしてそれを楽しんでいることに気がついた。結果、当然のことながら、終わるころには全く違う内容の物語になった。

いとこたちには、ウケた。

最初こそ絵本がないことに戸惑っていたようだが、物語好きDNAのなせる業か、はたまた運の良さか、いたくお気に召していただけだった。更に、思いがけないことに、本を見ずに物語を語

る私に、いとこたちはくすぐったいほどの尊敬のまなざしを向けてきた。

そして、「もっとそよちゃんのお話が聞きたい」なんて可愛いことまで言ってきた。

その言葉に気を良くし調子に乗った私は、今まで読んだ多くの物語に、私なりのアレンジを加えて次々と語って聞かせたのだった。

—— 思えばそれが、全てのことはじまりだったのだ。

「いやあ、本当に残念だけど」

文芸部顧問の山中先生は、前置きも少なく部が正式に廃部になったことを伝えてきた。

放課後の職員室は先生たちの姿もまばらで、開け放った窓からは運動部のかけ声やホイッスルが聞こえていた。

廊下からは、吹奏楽部の音合わせが聞こえてきた。ブーとかボーとか。高くなったり低くなったり。私にとって少し間抜けなブーボーにだって、聞く子が聞けばそれぞれに音があるんだろうなあと思った。私に、聞く耳がないだけ。

ああ！ みんな部活をしてるんだ！ 自分の好きなことをしてるんだ！

そう思った途端、足の裏が熱くなってむずむずとしてきた。こうして一人職員室に突っ立って、私はなんでこんな話を聞かなきゃならないんだと恨めしい気持ちにもなってきた。

不公平だ。

不条理だ。

そもそも、去年私が高校に入学したときから文芸部は虫の息だった。新入生は私一人で二年生はゼロ、三年生が四人（そのうち幽霊部員が二人！）といった具合でようやく部として成立している状態だったのだ。

だから、こうして先生から廃部を告げられることは予想できるところであつたし、客観的に見ても妥当だと思えた……。

しかし！　しかしですよ！

自分の代で部が潰れるなんて、胸くそが悪いっただらありやしない。潰すなら、去年の時点でそうして下さいていうの。まだ、先輩たちがいる時点で。だったらその傷を、みんなで舐めあえたものの、今潰されたら私しかないじゃないかよ、おいっ、てな感じよ。ああ、でも。この顧問がいるといえはいるか。「本当に残念だけど」なんて言いながら、ちっとも残念な顔をしていないこの顧問がつ。

がーっ！　つまり、私の紹介の仕方じゃダメだったってことか。今年の新生はゼロだったってことよね。廃部になったってことは。つまり、そういうこと。くー！　脱力。

この間やった新生向けの部活紹介、部員が私一人だけになった文芸部では、当然私がそれをした。っていうか、するしかなかった。はつきり言って一人で部を背負うなんて重荷だし、それに一人で部の紹介をしたとこなんてうち以外はなかったし、それって恥ずかしいし、もうこんな部なんて潰れちまえて思ったことは確か。

……まあ、確かに。

そうは思ってたけれど、悲しいかな、ほんの少しは期待してしまいましたが。もしかしたら、物語好きの新生が何人か入ってくれて、でもって「先輩」なんて呼ばれたりして、なんて。

そんな夢を見なかったといえは嘘になる。

「三矢、おい。聞いてるか」

おおっと正気に戻る。聞いてはいましたが、ちとちがう世界に行
ってましたよ。

「まあ、本当に残念だけど」

さっきも聞いたような台詞を言ってくる山中先生は、どう鼻屑目に見てもやっぱり残念そうじゃなかった。

残念っていうよりも、どこかすっきりとした、もっと言わせてもらえば晴れやかな顔にさえ見えた。

まあね。廃部寸前の部の顧問でいることは、生徒である私には想像もつかない面倒さがあつたんだろうなとは思うけど。でもよ、表面上だけでもいいから、せめて今だけは残念そうな顔を見せて欲しかったって思うのは私のわがままでしょうか。

先生は私がちゃんと聞いているかを確かめた後、「部室にある私物は持ち帰るように」とか、「それ以外は特にすることはないから」とかそういった後始末的なことを話し出した。

ああ、そういえば部室があるのをいいことに、私物をあれこれと置いていたなあと思い出し、それを全部持ち帰らなくちゃいけないってことを考だすと軽くめまいがしてきた。

部室に置いてあるのは、ほとんどが本だった。

本は重い。……重い。

何か打つ手はないものかと考えつつも山中先生の言葉に頷くと、自然と先生の足もとに目がいった。

顧問の、いや、もと顧問の山中先生は30代半ばの国語の先生だ。授業になると大声でテキストを読みながら、ずったずったと教室を歩き回るのが特徴といえば特徴の先生である。

元氣はいい。

見た目もそう悪くはない（しかし、いいというわけでは全くない）。

そう考えると、足元にももう少し若さというか覇気があっていい気がした。

日曜大工センターの入り口に、セールの赤文字に飾られどっさり積まれているような茶色のビニサンは、どう考えてもいただけくない。しかもこのサンダル、右側の甲のところが既に破れかかっている、余計にくたびれた感じを醸し出していた。

さらにそのサンダルに包まれた靴下も微妙なものだった。普通の黒の靴下なんだろうと推察するけど、ところどころ肌の色が透けるくらい繊維が薄くなっている箇所があるのだ。まさか初めからこういうデザインとは思えない。

古いものを最後まで大切に使っているというよりは、無頓着でそのまま履いているって感じだ。

先生は、独身だったはず。お嫁さんがいてこれなら、また面白いっていえば面白いけど。

ふと、顧問が山中先生じゃなかったら、クラブは潰れなかったんじゃないかって思った。……いや、それは被害妄想か。

潰れたのは部員が集まらなかったからなんだし。そして集められなかったのは私だ。

「なあ、三矢。おまえ、このままどこのクラブにも入らないつもりか」

つもりもなにも入りたいクラブはもうないんですけどっ、なんて突っ込みを心の中に入れる。

「そんなの。……わかりません」

うちの学校は部活は必須じゃないから、このまま帰宅部になろうかなって実は思っていた。

「三矢の気持ちはわかるけど、あれだぞ、高校時代に何かに打ち込むのは、いいことだぞ」

どっかの本に書いてあるような、なんかのドラマで熱血教師が言いそうな、あったーりまえのことを言うのと、先生は満足そうに頷いた。

「きっとおまえの才能が生かせるところがあるはずだから」

はあ？

才能？

あるか私にそんなもん。

だったら教えてくれよってな言葉をぐっと飲み込むと、私はわざとらしい笑みをはりつけた顔を先生に向けた。

『イマドキ、みんなで何かをするなんて、だるくない？ かえって良かったと私は思うよ』

部活が潰れたことを、違う高校に通う中学時代の文芸部仲間にもールをしたらそう返事がきた。

彼女は生島展子といって、高校に入ってから帰宅部となり、小説はケイタイで書いていた。ケイタイでのサイトも持っていて、そこそこ人気もあるようだ。

ちなみに生島が書くのは、ホラーだ。

犬が苦手で、小さな犬がいても怖がって私の後ろに隠れるくせに、スプラッターは大丈夫だなんて人間って不思議だ。

私がそう言うと「すごい冷めたところなのに、そよが童話を書くほうが不思議だっていうの」と返される。

私が冷めているかどうかは置いておき、童話を書いているのは本当だ。

いとこたちとの体験から、私はすっかり物語作り、それも子ども向けの物語にはまってしまったのだ。

そしてそれこそが、廃部寸前の文芸部をもり立てられなかった理由でもあった。

私の書く童話には、オリジナリティがない。

私が書く童話は、既存の物語のパロディなのだ。

題名を言えばピンとくると思うけど、たとえば「マッチ売りの三

匹の子豚」とか、「一寸法師頭巾ちゃん」だったり。

ちなみに、「マツチ売りの三匹の子ぶた」はラストがあまりにも強烈で、いとこたちから号泣者が続出したため母からは、「子ぶた物語禁止令」などというものが出された。

お母さんだって、豚肉好きなくせにさあ、なんて拗ねながらそのことを生島に報告すると、あんたの童話にはホラーの魂があるね、と褒められた。

ホラーの魂ってどんなのだよ。

それに、そもそも童話だって、そうかわいだけの物語じゃないんだけど。

とはいえ、嫌がる人に無理にそれを語り通すほどには、私もそこに拘りはなかったし。

まあ、そういったこともたまにはあるものの、古今東西の昔話や伝説といった民話や古典ともいえる創作童話の数々を読むうちに、これとあれがくつついたら面白そうとか、これはこんな展開になったほうが面白いんじゃないかって、私の興味の対象はもっぱらそっち方面だった。

生島や文芸部の先輩たちみたいに、何が何でも正真正銘のオリジナル小説を書くんだ、といったことにあまりこだわりはなかった。

そして、そんなオリジナルを追求する人の中にと、同じ「創作」といった括りの中いても私は完全にイロモノだった。

とはいえ、いろんなものを書く人がいるのはいいことだと先輩たちは優しくかったし、私が書くものを喜んで読んでくれた。

しかし、先輩は卒業され、残ったのはイロモノの私だけになった。

イロモノは、正統派があつてこそ光るのものであつて、単体となると消えそうな電球の光みたいな存在だった。

当然そこに魅力を感じてもらえるほどの威力はなく、同学年の部員も私一人から増えることもなければ、新入生も入らなかった。

『かえって良かったと私は思うよ』なんて、多分生島は慰めの意味で言ってくれたんだと思うけど、いろんな意味でまだそれを受けとれるほどには、私の気持ちは上がっていなかった。

「そよちゃん。そおよちゃん。起きてよお」

日曜の朝っぱらから、私のベットのそばに立つのは、白雪姫の王子様でもなければ、シンデレラの魔法使いでもない。

「……う。おはよ、ミチカ。あ、ほらミチカ。ハナ出てる。ふいて、ふいて」

よろよろと体を起こしながら、そばにあったティッシュペーパーを一枚取り今年小学一年生になったいとこのミチカの鼻に当てる。ミチカが顔をしかめながらフンとハナをかむと、手にあったティッシュがとたんに湿り気を帯びた。

部屋の隅にあるゴミ箱にそれをぽんと投げ捨てると、重い体をよいしょと起こした。

完全に寝不足。ああ、体が重い。頭も重い。

「そよちゃん、ほら。お話会だよ、お話会」

ミチカは、体は起こしたもののベットのの上に座ったままの私を、うんしようにしょと引っ張りながらそう言った。小学生とはいえ、本気の力を出されるとさすがにやばい。

「起きるから、わかったから、引っ張らないの」

その言葉に安心したのか、ミチカは私の手を離すとベットにちょこんと座った。

ミチカは近所に住む母の妹の娘だ。彼女はいとこの中で最も私の物語に執着を示す子でもあった。

母はミチカのことを、「そよのファン一号さん」と言う。

……まあ、悪い気はしないけどさ。

「ふふ。そちゃん、今日から新しいお話でしょ。楽しみだね。みんなもそう言ってた」

ミチカの言葉にハハと笑いながらうーんと伸びした。

そして、着ていたスウェットを脱ぐと、床に落ちていたシャツとジーンを身につけた。

新しい物語。

だから寝不足なんですよ。頭も体も重いんですよ。なんてことは、ミチカには言わないけどね。

「あれ、ミチカ、朝ご飯は食べてきたの？」

そういえば今は何時なんだろうと部屋の時計に目をやると、八時を過ぎたところだった。

間に合ったっていうか、ちょうどいい時間だ。

「うん、食べたよ。ミチカね、そちゃんの分のおにぎりも持ってきたもん」

そう言うミチカは、小さなバスケットを私の目の前にぐいっと差し出してきた。

「おお！ 愛い奴じゃのう」

よしよしとミチカの頭をぐりぐり撫でると、ミチカは子ネコみたいに笑った。

さてさて、急がねば。ミチカ以外にも、私の物語を待っていてくれる子たちがいるのだ。

「じゃ、行きますかいな」

ミチカの手をとり歩き出すと、弾むような足取りでミチカはついてきた。

「あ、そうだ。ごめん、歯だけ磨かせて」

寝起きの口の中ってすごく汚いんだってよ、と私がそう言うときチカは腰に手をあて顔をしかめ「もう。早くしてよ」と偉そうに言った。

ミチカと、まだ半分寝ぼけ眼の私とが外を歩き出すと、どこから見ていたんだろうかと思うほどの子どもたちが表に出てきた。

子どもたちは帽子を被り、首からは水筒をぶら下げたり小さなりユックを背負っていた。

うむむ。今日も今日とて気合が入っておりますなあ。

玄関先まで出て見送るママさんたちに、「そよちゃん、今朝もよろしくね」なんて声をかけられる。

よろしくされるほどの事でもないんだけど、と思いつつ「はあい」なんて調子よく手を振ってみたり。

気がつけば、いつものように私とミチカを先頭にわらわらと子どもたちが後ろについて歩いていた。

私はともかく、あまり列の先頭と縁のないミチカは、ここぞとばかりに毎回得意げな顔をするのだ。

私達の行き先は、すぐそこにある公園だ。

その公園には、いい具合に円形のベンチがあり、物語を語るにはぴったりのシチュエーションだったのだ。

「へえ、夢のお告げ通りだ」

調子よく元気に歩いていた私の耳に、いきなりそんな声が聞こえてきた。

見ると、えらくオトコマエの男子が公園の入り口にある柵に、腰をかけていた。

絶対に知っている顔だ。

だけど、名前が思い出せない。

「うー、かゆかゆするわ」

自分の記憶力の悪さにいらつき、左手で胸のあたりを摩りだすと（っていうよりは、搔きだすと）、ミチカから怪訝そうな視線を向けられた。

ハハハなんて笑って、その手をさりげなく頭に移動させながら、こいつの名前をミチカに訊いたところでわかるはずもないしなあって埒もないことを考えていた。

オトコマエはというと、柵に座ったままニマニマとした顔でこっちを見ている。

腹に虫でもいるのか？

変な男だ。

そんな私達の様子になにかしら感じたであろうミチカが「あの人、そよちゃんの友だち？」と訊いてきた。

すると、それに重ねるように後ろにいた子の一人から「わかった！ そよの彼だろ！」なんて、生意気な声が飛んできた。

「彼？ んなわけないっていうのっ！」と、まさに今、私が言おうとした台詞が別の子から飛び出した。そして本人である私そっちのけで、あーでもないこーでもない、子どもたちは好き勝手なことを話しだした。

ここにいる子たちは、幼稚園児から小学校低学年の皆さんだ。大

人が「幼い」とか「かわいい」なんて思っている年頃の子たち。けれど、この子たちが大人が思う以上にませていて、ラブな話が大好物だっというのは意外と知られていないことかもしれない。

下手すると園児でありながら私よりも経験豊富な子もいるくらいだから、恐れ入る。そんな子たちにとって、このオトコマエは格好のエサだった。あ、オトコマエだけじゃないか、私もセツトだ。

ほんとに、ラブな話が好きだよねえと半ばあきれながら、いつもよりも賑やかになった子たちを連れ、オトコマエの側を通る。

通りたくないけど、公園に入るには通らなくちゃいけないし。すれ違いざま「ハネグンだよ」と私が訊くと、「酷いなあ、三矢さん。ぼく、隣のクラスだよ」なんて答えが返ってきた。

やっぱり！

見たことがある顔だってことは、正解。

あとは名前かあ。

ちなみにハネグンとは、私たちが通う高校の通称だ。

波根野群青高校。

このやたらと長ったらしい名前が、うちの校名だ。

波根野はこの地名だからともかく、なぜ群青なのかは謎だ。

一説によると、青春の青さを表しているとの話だが、青春云々はともかく生徒には、ほとほと迷惑な校名だ。

長いし、面倒な字が多い。

校名を書く時、一々面倒なのだ。波根野だって面倒なのに、それに加え群青。

世の中には、群青なんて文字を一生書かない人だっていると思う。生活面においても、必要のない文字だし。

校名を付ける人には、そこんとこ考えて欲しかったものだと思う。

でもそんな校名とわかっていて受験したのは誰かと聞かれるとアレレになるので、露骨には言わないけど。でも、心の中ではぶすぶすとかすぶっている思いではある。

校名を長いと思うのは、私だけではないのだろう。

だから、みなハネグンと呼ぶ。

生徒だけでなく、親も先生も。

ハネグン。

この、なんの名前だかわからないそのわからなさを、私は結構気に入っていた。

そしてハネグンのオトコマエはというと、柵から離れ、なんと私達と一緒に公園に入ってきた。

ちらりとみると、やけに涼しい顔をしている。

全くもって変な男だ。

当然のような顔をしてついでくるこの男が気にならないといった嘘になるけど、優先順位を考えるとそれは低い。

ラブな話で盛り上がっていた子どもたちも、公園に入ると頭の中がお話モードになったようで、ベンチのどこに座るかでもめ出した。

そんな命がけの顔をして席決めをしなくっても、席なんてどこに座っても同じなのになえと思ってしまうあたり、自分の老いを感じる。

老いと言ってしまうのはアレかな、乱暴かな。

つまりこんなところが、生島に「冷めている」と言われる所以なのだろうなあ。

でもさ、好きな子の隣に座ったところで、その子が自分を好きになってくれるわけじゃないのになえとは思うよ。

「よう！ 作家先生」

おはよう、朝から大変だねえ、と労いの言葉をかけてくれるのは、側のベンチで将棋をさすおじいさんたちだ。

おじいさんたちは、将棋だけでなく、さりげなく子どもたちの様子も見ってくれるので助かる。

おはようございますとぺこりと頭を下げると、おうと手を上げて応えてくれた。そういった関係って、心地いい。

子どもたちが揉めるままにしばらく待っていると、段々とその様子が変わってきた。

落ち着いてきたのだ。

どうやら今日の席は、決まったらしい。

お話を始めた最初のころは、それこそベンチに座らせることか
らして一苦勞だった。誰の隣がいいとか、この場所がいいとか
んとか。

でも、何回か子どもたちと席の決め方の話しをするうちに、段々
と自分たちで折り合いをつけていけるようになっていった……と思
う。

こういったさばきかたも、いとこたちとの間で学んだことだ。

一人っ子の私が、なんだかんだと言いながらもこうして子どもた
ちと付き合えるのも、そういった経験の賜物なのだ。

落ち着いたところで、みなをぐるっと見回した。子どもたちの表
情をチェックするためだ。

トイレに行きたそうな顔の子や、あまりにも変な表情をしている
子がいらない限り、私はいつもそのまま話を始めた。

たまに、私がこうして見回すだけで「やっぱ、席変わる」と、強
引に決めちゃったと思われる子が他の子に席を譲る場面も見られた。
それはそれでいいのかなって思うし、そういったのも面白いなっ
て思う。

今日の物語は「北風と太陽」のアレンジだ。

趣味で書くときは、結構マニアックな物語も題材にするけれど、
子ども相手の時は有名なものを取り上げるようにしている。

そのほうが、もとの物語を知っている分、楽しいのかなあと思う
反面、あまりそこには拘らなくてもいいのかなあと思う時もある。
そこらへんは、まだ今一つ掴めていないところだ。

そもそも私が取り上げる物語は、それ自体が既に完成されたもの
で、はつきりいってしまえばアレンジの必要なってこれっぽっちも

ない。

わかってはいても、ついついこの物語に他にも道があったのなら
どうなるかなあ、と私は考えてしまう。

それは、お母さんがダイエットすると言いつつもコーヒーに砂糖
を二杯は入れてしまうのと同じくらい、仕方がないことなのだ。

そうせずには、いれないのことなのだから。

そういった私レベルの問題とは別に、こんな話をいところたちなら
ともかく（まあ、そこは親戚ってことで）、よそ様の子にしちゃっ
ていいもんなんだろうかって葛藤はあった。

しよせん私の語るそれは、ほら話だと自覚があったから。

でも、私が話すことで、オリジナルを読むようになったとか、物
語が好きになったという声を聞くと、私みたいな存在もありなの
かなとは思うようになった。

でも、胸を張って、とまではいかない。まあ、こそこそとやって
いるといった感じだ。

「冬のある日、北風は太陽のところにくるとこう言いました。太陽さん、太陽さん。あなたとぼくのどちらが偉いかを決めませんか」

「北風と太陽」はイソップ寓話だ。

「イソップ童話」として馴染んでいた私は「寓話？」と思ったけれど、調べると寓話とは道徳的な内容が含まれる物語を指すそうであるほどなあと考えた。

イソップ、イソップと当たり前のように私たちが呼んでいるこの人物は、紀元前の生まれのギリシャ人で、奴隷だったともいわれる。詳細は不明だ。彼に関して調べると果てがないように思えた。なにせ大昔の話である。

けれど、もしこの情報が本当だとすると、紀元前の人に関わった物語が、ネットだゲームだといわれる今の世でも、私を含めた日本の子どもたちが一度は聞いたことがある物語となり残っていることは、愉快に思えた。

世の中がどんなに変わっても、人の本質は変わらないって、だから通じる物語なんだって思うことができたから。

「北風と太陽」の続きはこうだ。

北風と太陽は、旅人の上着を脱がせたほうが勝ちだと決めた。

結果は、太陽の勝ち。

旅人は、北風が吹けば吹くほど上着をぎゅっと体に巻き付け、反対に太陽のあたたかさを感じることでそれを脱いだのだ。

またこの物語には別のバージョンがあつて、それには上着対決の前に帽子対決があり、北風が勝っている。

初めてこの物語を聞いたとき、太陽が勝ったことに胸がすつとした私だが、しばらくするとどうして勝負をしたのが、北風と太陽だけだったのだろうと思い始めた。

例えば、雲が参加していたらどうなっただろうと。

北風といると良い存在の太陽が、雲がくることでかわるんだろうかつてことも気になった。

そう思った思いが、今回の物語の発端だ。

物語に対し、こうしたらどうかと思うことはよくあることだけど、それはあくまで自分の頭の中だけのことだ。

これを誰かに物語として話すとなると、それなりの展開やオチも必要になってくる。聞く方が、納得できなきや物語の意味がない。ここが、一番頭を使うところだった。

「北風さん、太陽さん、こんにちは！　そこにやって来たのは、空にぶかぶかぶかと浮かぶ、ねずみ色した雲でした」

雲の登場で、物語はイソップから私の物語への扉を開けた。

「雲？」

「雲だって！」

子どもたちから、興味津々の声があがる。
これが快感。

よしよし、と微笑んだら、オトコマエと目があった。

……なんかいやな感じ。

「やあやあ雲さん、こんにちは。北風と太陽は、ぷかぷかと浮かんでいる雲に挨拶をしました。雲はにこにこしながら、北風さん、太陽さん、いったいなんの相談をしていたんですか？　と尋ねました。すると北風は、実はぼくたち、勝負をしようと話していたところなんだ、と威張ったように冷たい風をぴゅうと雲に吹きました。勝負、ですか？　雲が聞くと、今度は太陽が、そうなんですよ、私と北風さんのどちらが偉いか、勝負をするんですよ、と少し威張った声で言う、と、ぼかぼかとしたあたかな日差しを雲に向けました。するとどうしたことでしょう。その勝負にぼくも参加させてくれませんか、と雲が言ったのです」

「雲が？」

「雲なんて」

「なにも武器ないじゃん！」

予想通りの反応に、またにまり。

そしてみんなのその思いは、北風と太陽と同じでもあることも、物語を続けながら語った。

「ちょうどその時、お母さんと女の子といった親子連れが、道を急いでいる姿が見えてきました。

女の子はまだ小さく、腕には大きなクマのぬいぐるみを抱えています。

お母さんは、急いでいました。

ああ、早く帰って洗濯物を取り込まないと。

それにそれに、夕飯の材料も買わないと。

お母さんには、しなくちゃいけないことが、たくさんあったのです。そのことだけを考えていたので、女の子を引きずるようにして歩いていることに、少しも気がつきませんでした。

お母さんに引きずられながら、女の子はぬいぐるみを見ていました。ぬいぐるみの手にある風車が、かみぐるま気になっていたのです」

クマのぬいぐるみが風車を持っているんだよ、ってことをアピールするために、みんなに見えるように手を上げると、徐にぎゅっと握った。

集まる子の年が少しばらけていたので、言葉だけじゃなく、ゼスチャーを入れたほうがわかりやすいかなと思って、たまにこうしたこともしていた。

でもこれをあまりすると、お話会じゃなくて一人芝居になってしまうので、その加減は難しいなと思う。

「北風は、風車を見るとにやりと笑い、誰があの子を笑わせることができるか勝負しようと言いました。

そして、風をぴゅうと吹き、風車を回したのです。
クルクルクル。

風車は勢いよく回り始めました。

それを見た女の子は、嬉しそうに笑いました」

「なんだよ。だったらもう、北風の勝ちじゃん」

「ああ、もう、終わったあゝ」

「そんな、まだわかんないよ」

「そうだよ」

子どもたちのいろんな意見が出る。これも楽しい。私は物語を続けた。

「北風は、自分が勝ったと思うと嬉しくなりました。

そして嬉しくなった北風は、嬉しくなりすぎて、ぴゅうぴゅうぴゅうと、風をたくさん吹いたのです。

風車が回って喜んでいた女の子でしたが、ぴゅうぴゅうと吹く北風に、ぶるぶるっと震えました。

そして、クシュンとくしゃみを一回しました。

お母さんは、女の子のくしゃみに気がつきました。

そして、自分のマフラーを外すと、それを女の子の頭から首へとぐるぐる巻きにしたのです。

ハァークション！

寒くなったお母さんは、大きなくしゃみを一回すると、また女の子を引きずるようして歩きだしたのです。

それを見た北風は、しまった！と思いました。

そんな北風の隣で、次は私の番ですね、と太陽が笑いました」

子どもたちは、黙ったままじっと私の顔を見ている。集中している。よしよし。

8 (後書き)

「」の中の物語ですが、字が詰まると読みにくいと思い、一文ごとに改行しています。

「太陽は、ぽかぽかとした日差しを親子に送りました。

すると、女の子にマフラーをあげ、寒い思いをしていたお母さんの顔が、笑顔になりました。

あたたかくなって、ほっとしたのですね。

その笑顔を見た太陽は、もっともっと喜んでもらいたくて、ぽかぽかの日差しをたくさんたくさん送りました。

ぽかぽかぽか。

すると、どうしたことでしょう。

お母さんの顔から、笑顔が消えました。

女の子が立ち止まりました。

お母さんもつられて止まります。

女の子は、ぐるぐると巻かれたマフラーとコートを脱ぎだしました。暑くなってきたのです。

慌てたお母さんは、女の子が外したマフラーを自分の首に巻き、女の子が脱いだコートを手に持ち、さらに女の子のぬいぐるみまで持ちました。

マフラーにコートに、ぬいぐるみ。

暑くなったお母さんの顔は、おさるさんのように真っ赤っかです。

汗も、だらだらと出てきました。

とても苦しそうな顔です。

それを見た太陽はしまった！ と思いました。

そんな太陽の隣で、次は私の番ですね、と雲が言いました。

雲は、太陽と親子の間にずっと入ると、陰を作りました。

すると、お母さんの赤かった顔は元通りになりました。

女の子もお母さんが持っていたコートを着て、クマのぬいぐるみも自分で持ちはじめました。

二人は顔を見合わせると、くすくすと笑いだしました。

なんだか変なお天気だったわね、とお母さんが言うと、変な天気だね、と女の子も言いました。

そして二人はもう一度、くすくすと笑ったのです。

そのとき初めて、お母さんは、女の子が持つぬいぐるみに、風車がついていることに気がついたのです。

お母さんは女の子の頭をそつと撫でた後、少し屈み、ぬいぐみが持つ風車へ、ふうと風を送りました。

クルクル。

風車は回ります。

それを見た女の子は、自分でもふうと息を吹きかけました。

クルクル。

風車が回ります。

女の子の顔が、笑顔で輝きます。

それを見たお母さんの顔も、笑顔になりました。

お母さんは思いました。

このお天気なら、急いで洗濯物を取り込まなくてもいいわね。

それに、夕飯の買い物だって、考えてみたら昨夜のシチューがまだ残っていたじゃない。

お母さんは女の子と手を繋ぎました。

そして今度は、女の子の歩く速さに合わせて、ゆっくりと歩き出したのです」

聞いている子たちの顔も、物語の女の子と同じように輝いている。

「ずるいずるい、雲さんずるい！

突然、大きな声がしました。

北風です。

北風はそう言って怒りだすと、雲に向い風をびゅうと吹きました。だってだって雲さんは、ぼくと太陽さんが寒くしたり暑くしたりしたから、勝てたんですよ。

ってことは、ぼくたちがいないと勝てないってことですよ。

そう思わないかい、太陽さん！

雲の勝ちだと思っていた太陽も、北風の話聞いてるうちに、それかもしれないなあと思い始めました。

でも、何かが引っ掛かります。

……ええと、うん。でも。

太陽は一生懸命考えます。

そして、自分たちが、寒くしたり暑くしたり親子を思い出しました。待って、待って、北風さん。

私は、この勝負に勝ったのは、やっぱり雲さんだと思います。

北風さん、思い出して下さいよ、あの親子のようすを。

太陽に言われて、北風も一生懸命に思い出しました。

そして、わかったのです。

雲があの子二人に、笑顔を与えたことを。

北風は、女の子のこじしか考えませんでした。

そして太陽は、寒そうなお母さんに気がいってしまいました。けれど、雲はお母さんと女の子、二人のことを考えたのです。

二人を笑顔にしたのです。

北風と太陽は、雲に謝りました。

何にもできないと思って馬鹿にしていた雲に、謝ったのです」

お話会が終わる頃になると、子どもたちの親や家族が公園にちらほらとやって来た。

一旦、休憩をしたあと、みんなで「だるまさんが転んだ」を何回かしてから、会をお開きにした。

お開きにした、んだが。

「なんでまだいるの？」

私の側にぴたっと張り付くミチカはともかく、例のオトコマエまで私の側にぴたっという。

結局この男は、話を最後まで聞いていただけでなく、「だるまさんが転んだ」にまで参加してた。

「うん、実は、三矢さんにお問い合わせがあった」

オトコマエは、その武器ともいえる笑顔をピカールと私に向けてきた。

おおっ。ま、眩しいぞ、おいっ！

「な、なによ。お願いって」

決してうぬぼれるわけではないけど、男が女に向かってお願いといえば、なんとなあく期待……でなく、予想はできる。

しかし、待てよ。

名前も思いだせないような人からの、そういったお願いを受けてもいいんだろうか。

いや、う、受けるなんて。受けるなんて、まだ決めてないし。

「スカウト」

——ん？

「え？ ス？ スカ？ 今、なんて言ったの」

「うん。スカウト。ぼく、三矢さんをスカウトしに来たんだ」
スカウト？

「やだ。もしかして、球団関係者？」

スカウトといえば、プロ野球だ。

「え、なんで？」

そう言うのと、オトコマエはケラケラと笑いだした。球団って。

「なにそれ、三矢さんって、野球選手を目指しているわけ？」

「いえ、全く」

ないな、ない。

これは完全に色恋の話じゃない。

ちよつと残念。

いや、ほら、何事も経験っていうからさ。

と、まあ、それはもういいけど。

「で、スカウトって何の？」

興味はそっちに移った。

「ああ、うん。紙芝居」

「紙、え？」

ちよつと待て。

そのキーワード、なんだったっけ。

今、それを聞いた瞬間、頭の中に血の雨がザーッと降ったんだけど。

「知らないか。知らないよね。あのさ、ぼくたち数人で、紙芝居を作ってそれを上演するサークルを立ちあげたんだ」

知ってる、というよりも、思い出しました。

更に言うと、目の前のあなたさまの名前も思い出しましたよ。

「ふたまたふたば二股双葉」

「あ、やだなあ。それってそんなに有名？」

少しでも、こいつにときめいてしまった自分を殴りたい。

二股双葉。

当然、あだ名。

本名は、こうだ国府田 ふたば双葉だ。

この男は、去年の暮、件の紙芝居サークルを立ちあげるにあたり当時三年生だった女生徒二人を手玉に取りもてあそんだ挙句、二人とも振ったという伝説の持ち主だ。

その際、血の雨がザーザー降ったとか降らないとか。

文芸部の先輩からも「双葉君ってどんな子」と聞かれたが、こいつとは全く縁がなかったため「さあ」なんてやる気のない返事をした覚えがある。

どうりで見たことがあると思ったはずだ。

彼は、有名人だ。

そんな伝説を持つくらいだから、そりゃ顔だっていいはずだ。間近で見たのは初めてだけど、確かに顔はいい。顔は。

「ええと。お断りします」

紙芝居はともかく、そんないわくつきのサークルなんかには、近づかない方が身のためだ。

「でも、困るなあ」

困れ、困れ、どんどん困れ。

でも私には関係のないことだ。

「ってことで、失礼します」

思いつきりの作り笑いを双葉に向け、ミチカの手を繋ぎ歩き始めると、「今日の物語、面白かったなあ」なんて双葉の声がした。

体は逃げたいのに、耳は聞きたい。

これは、物書きの悲しい性だ。

「ええと、二股……じゃなくて、国府田君。それって、ど、どんなところが、かなあ」

気がつくと私は、双葉に今日の物語の感想を求めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949y/>

ハネグンのほらふき娘

2011年11月7日13時07分発行